

## 2011 年度修士論文要旨

### グループホームに暮らすアルツハイマー型認知症高齢者の‘Comfort’の意味

#### —世界と自己をつなぎ続けること—

聖路加看護大学博士前期課程 老年看護学専攻 千吉良綾子

**I. 研究目的：**グループホームに暮らすアルツハイマー型認知症高齢者の日常生活における Comfort の表出及び、スタッフによる入居者の Comfort ニードをとらえたケアを参加観察・インタビューを通して記述し、グループホームに暮らすアルツハイマー型認知症高齢者にとっての Comfort の意味を記述する。

**II. 研究方法：**人口 4 万人強の地方都市にあり、6 名の看護師を配置している、創設 10 年目の認知症対応型グループホーム入居者 9 名とスタッフ 13 名を対象とし、2011 年 6 月から 9 月ののべ 23 日にわたり、参加観察、インタビューおよび資料収集を行った。データ収集及び分析は、エスノグラフィーの方法論を用い、データ収集と分析を並行して行い、帰納的にカテゴリ抽出を行った。

**III. 研究結果：**参加観察場面数は 71 場面であり、インタビューは、グループホームに勤務するスタッフ 13 名へ計 18 回行った。入居者は 73 歳—94 歳までの女性 9 名、平均年齢 84.6 才であり、認知症の重症度は、行動観察尺度 Functional Assessment Staging (FAST) 分類 5 以上のアルツハイマー型認知症中等度～重度期が 8 名をしめた。分析の結果、Comfort に関する 8 つのサブカテゴリ【馴染んだ暮らしの基盤がある】【感情の揺れ幅が暮らしの豊かさとなる】【馴染みの関係に孤独を薄める】【楽しみや喜びを分かち合う】【輪の中で個性が際立つ】【自己を確かめる】【消えない自己を保つ】【消えゆく自分をうめる】が抽出された。スタッフのケアについては、9 つのサブカテゴリ《本人の側に立ち普通の暮らしを支える》《エンジンをかけ感情のうねりを生む》《絆を深め場を育む》《反応をみながら場の力を引き出す》《一人ひとりをよくみる》《コアをつかみ補助自我となる》《感情の波をよみその人の世界へ歩み寄る》《つながりの乱れをぬぐう》《混乱をきりリズムへつなげる》が抽出された。両者に対応した 3 つのコアカテゴリ【馴染みの中のゆらぎ】【共在感覚】【世界と自己をつなぎ続ける】が抽出された。

(1) 認知症高齢者にとっての Comfort は、【馴染んだ暮らしの基盤がある】上に【感情の揺れ幅が暮らしの豊かさとなる】といった【馴染みの中のゆらぎ】があった。(2) 【馴染みの関係に孤独を薄める】、【楽しみや喜びを分かち合う】、【輪の中で個性が際立つ】、【自己を確かめる】といった【共在感覚】も Comfort となっていた。(3) 認知症高齢者が合わせ持つ、消えない自己、消えゆく自己に対し、それぞれ【消えない自己を保つ】、【消えゆく自己をうめる】といった背景から、認知症高齢者にとっての Comfort の意味は【世界と自己をつなぎ続ける】ことであった。

**IV. 結論：**認知症対応型グループホームに入居する高齢者の Comfort の意味は、8 サブカテゴリ、ケアに関する 9 サブカテゴリ、両者に対応する 3 コアカテゴリが抽出され、認知症高齢者にとっての Comfort の意味は【世界と自己をつなぎ続ける】ことであった。